厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）
（総括・分担）研究報告書

聴覚障害児に対する人工内耳植込術施行前後の効果的な療育手法の開発等に資する研究

研究分担者　北　義子　国立障害者リハビリテーションセンター学院　主任教官

研究要旨：聴覚障害児に対する人工内耳植え込み術施行前後の効果的な療育手法の開発等に資するガイドライン作成のために「母親のかかわりが人工内耳を装用した聴覚障害児の発達に影響を与えるか」という観点から文献研究を行った。母親が人工内耳植え込み前後の児の発するわずかな徴候や行動を感じ取り、その背後の意味を推測し迅速かつ適切に応答する能力（Maternal Sensitivity:MS）は、聴覚障害児の言語や認知機能の発達に良い影響を与えることが示唆された。

A．研究目的

母親のかかわりが人工内耳（CI）装用児に及ぼす影響について内外の文献から明らかにし、今後のCI装用前後の療育やリハビリテーションのガイドラインを作成するにあたり、示唆を得ることを目的とした。

B．研究方法

PubMedと医学中央雑誌において検索語を用いて検索を行った。このうち母親のかかわりと聴覚障害児の言語やコミュニケーション、認知発達などについての具体的に数値等の記載のあるものを対象として精選し、さらにハンドサーチにて心理学等の領域の文献をも加え海外文献９件、国内文献4件を対象とし、アブストラクトテーブルを作成、内容について分析した。

C．研究結果

米国では、1991年よりアメリカ国立小児保健・人間発達研究所（NICHD）において典型発達児の保育に関する大規模かつ長期にわたる縦断的研究が進められる中で、母親によるかかわりが母子遊びの観察データから数値化された。母親のかかわりはMaternalSensitivity(MS)と表現され、母親が子どもの発する行動やサインの意味を感じとり、迅速かつ適切に応答する能力を指す。MSは典型発達児の言語や認知機能、社会的行動の発達に関連することが明らかとなった。後に聴覚障害児の言語・認知機能の発達についてもMSとの関連が注目され、特にNiparkoらによる一連のChildhood Development after Cochlear Implantation(CDaCI)研究において母のかかわりについて前向きの多施設研究がなされ、人工内耳装用前の良好な母親のかかわり(MS)は装用後の言語理解/表出に大きく貢献することが明らかになった。指導プログラムについても発話と言語中心の指導プログラムから、MSについてのプログラムを合わせることや、親へのコーチングが提唱されている。

D．考察

聴覚障害児の療育は新生児聴覚スクリーニングによって、乳児期から始まるようになった。乳児と長い時間を過ごす母親の療育への負担は大きいにも関わらず、現在の日本では母親や家族に対し、具体的に母親のどのような行為や感性が聴覚障害児の発達にとって望ましいのか、示すことができる施設は多くない。MSの重要性を認識し高いMSを母親が発揮できるような支援が求められていると考えられる。

E．結論

母親の良いかかわりは聴覚障害児CI装用児に最適な発達をもたらす重要な要素である。母親のかかわりの改善のためには、適切な個別指導を受けることが望ましく、また、かかわりの実践のためには時間が必要であることから、そのための経済的・精神的な支援、コストが必要である。

F．健康基本情報

G．研究発表

北義子：難聴乳児に“ケア・コミュニケーション“を　第20回日本言語聴覚学会in おおいた抄録集p91

H．知的財産権の出願・登録状況

1．特許取得
該当なし
2．実用新案登録
該当なし
3.その他
該当なし